

禪と淨土

藤吉慈海

仏法のことを殆ど忘れてしまつて、「老來仏法を都べて忘却し、独り閑邸に立ちて落梅を数ふ」なんて言う有名な句がありますけども、こういう立派な、落梅を数う様な境界迄には致つていませんが、仏法を忘れたことは間違いないことで、先程教えて頂きますと、何だか懐しい様な、恥ずかしい様な気持ちが致します。

曹洞宗との出会いは、先程おっしゃいました様に、旧制の佐賀高等学校に居ります頃に、沢木興道さんにお目に掛りました。併して、仏法というものは、こんなまあ爽やかなお坊さんを作るとかと思って、私はびっくり致しまして、それから、沢木さんは親しくなつて來た訳ですけども、その頃に、駒沢大学に坐禅堂が出来て、これから駒沢の坐禅に何か指導に行くことになるんだとおっしゃっておられまして、そういう御縁がございます。そして、沢木さんが、中国の旅行をして来られたお話を、更に聖徳太子会館でなさいまして、その頃、

沢木さんは、熊本に居たんですけども、毎月一回はやつて参りまして、『大智禪師偈頌』の講義をしておられたんですね。その時に旅行の話なんかを聞きまして面白いもんだけれども、私共も、程なく岩本秀雅という京都大学出身で宗教哲学をやって、波多野精一先生の御弟子さんでしたけども、道元、親鸞に大変な傾倒をしておられました。その先生と一緒に講演部で、上海、南京、蘇州、杭州に夏休みに参りました。それから更に二人で通訳を連れて南の方に下つて、寧波に行って、寧波から天童山に参りまして、道元様の身心脱落したお寺に泊めて頂いたり、それから育王山、雪竇山、普陀山の有名な江南の仏跡を巡つて帰つて参りました。沢木さんの行かれた所を大体回つて來た様な、その際でございまして、その記録は、後に岩本秀雅先生が文部省に提出致しました「教育者としての道元」という論文がございますね。先生が亡くなりました後で、それを平楽寺書店から出版致しまして、私

もその岩本先生と御一緒の旅行記と一緒に含めて出版致しました。その時、今度沢木さんに沢山買って貰って、売つて頂いた記憶がございまして、その後、鈴木格禪先生が又たそれを復写して、駒沢で使つているなんてことをおっしゃいましたけれども、そういう思い出が有りましてですね。

私は、先程おっしゃった様に浄土宗のお寺に生まれまして、父親がもう数え年五つの時、肺病で亡くなつたもんですから、殆ど精神的な指導者がおりませんで、老僧はおりましたけど、これは普通の老僧でして、何のことかさっぱり分からぬ。極楽浄土ということはどういう所か分からぬ。そこで育ちましたんですけども、子供の頃に、父親が生まれている所が極楽浄土であると。それは、太陽の沈む西の彼方に在るのだという風に素朴に信じまして、中学生の頃から父親が居ないものだから、自転車に乗つて学校から帰ると、お逮夜参りをするんですね。そうすると、佐賀平野の向うに真赤な太陽が沈むのを見て、あああそこが極楽浄土で、その所に父親が居るのだという風な信仰を持つて、南無阿弥陀仏とお称えするという様な純な少年時代を過ごした訳ですね。

そして、高等学校に入りましたら、沢木さんに会つて、仏法というものにはもつと違つた仏法が有り、禅というものは、こういう素晴らしい人を作るんだということにも驚きまして、それから沢木さんの坐禅会にも参加する様になりました、久

留米の医学専門学校の仏教青年会の摂心にも参加致しました。そういう私の非常に主体的な、修道といえるかどうか分かりませんけども、仏法というものを只だ学問的に研究するという風な興味はあんまりなくして、自分自身が仏法によつてどういう体験をしなくちゃならないのかという風な、関心の強い青年時代を過ごしたわけです。それで、沢木さんなんかが坐禅をして、ああいう非常に爽やかな風格を作ることができるのかということに興味を持って、道元禪師の遺跡を、高等学校時代に、高校三年の時、実際には尋ねることができたという風なことも、私にとっては非常に大きな感激でございました。

そして、その翌年京都大学に入りましたて、永平寺に正月の休みに岩本先生と御一緒に参堂して、正月の行事を見せて貰つたり致しました。その時の副監院、何とか言う方でしたけれども、そこに行って話をしておりましたら、一人の雲水が入つて来て、何とか言う雲水さんが「気が違いました」と、言うと、副監院の人が「おおそうち、逆さまにして吊るしておけ」と、こう言ってですね、それで知らん顔してくるんですね。雲水さんは「はい」と言つて帰つて行きました。気が違つた雲水さんを逆さまにして、ぶら下げたらどうなるかと心配致しましけども、副監院さんはそう言つて平然としておられました。禅というものは大分酷いことをやつたりしたり

するものだと思つて、まあこう思つておりまして、その話も昨年だつたか永平寺で致しましたら、その副監院さんは誰かということを大分追求されました。名前を忘れてしまいました。臨濟ではそういうことを言うけども、曹洞では余りこういうことをしませんがねと、まあ皆さんが話しておりましたけど、明らかにそういうことが有りまして、でも、本山版『正法眼藏』の書物を御土産に頂いたりまして、大変深い感激を貰つたことでございました。

それで、当時の私には、一方では念仏をするという一つの修道団体みたいなものがございまして、そういうものに参加致しまして、一週間、正月の休みに木魚を叩いて念仏をして、阿弥陀様の姿を描いた絵に向つて電灯を消してですね、蠟燭だけ点けて、こう念佛して、目を閉じても開けても念佛をしますと、その阿弥陀様の姿がこう自分で拝めるようにならなくてはならないと指導をうけていました。これは見仏です。仏を見ると、見仏と申しますね。見仏の体験をすると、まあ浄土教の中でもこういう体験をした人がございましてですね。山崎弁栄と言う、千葉県のお百姓さんの息子さんですけども、30歳位の頃、筑波山に籠つて念佛三昧に入つてお悟りを開いた様な体験を持った人でございます。その時体験を開いた様な体験を持つた人でございます。その時体験を

れたそうです。その意味は、衆生が仏を念すれば仏もまた衆生を念じたもう、一心に心を専らにして念すれば、念する私と念ぜられる阿弥陀様の区別がなくなる、そして、悟りを開いた王格がひとり了々としてあるのである、ということなのです。だから一心に念佛していると、悟りの境地が開けてくるものである、と山崎弁栄上人は教えられたのです。その団体が日本中におりまして、数学の岡清とかですね。それから、ギリシャ哲学の山本空外、この人は広島大学の先生でして、こういう人達が、山崎弁栄系統の念佛三昧をやる。今でもそういう体験を一週間位、籠つて摂心みたいな念佛三昧を修行しているのですね。そういうものに私なんかも参加致しまして、自分でもこう目を閉じても開いても、三昧仏を見るという風な体験をしなくちゃならないことを教えられて一生懸命やつたものですね。そうして五つの眼が開かなくちゃならないと、これは五眼といいますが、『無量寿經』の中に五つの眼がこういう風に開かなくてはならないと書かれています。それから、転識得智と言う様な阿賴耶識が転じて大円鏡智になるという様なことを教えられて、仏法というものは大変な教えだという。そういう体験をしなくちゃならないということに驚いてですね。本格的に仏教をやらなくてはならないと決心したわけですね。

そして、沢木さんは余りそういうことをおっしゃらなかつたけれども、つまり曹洞宗風の坐禅、只管打坐、道元さんの

正法眼蔵なんかを、まあ学生なりに読んで、岩本先生に、やっぱりこういう人が居られるのか、また、「有時の卷」、難しい「有時の卷」の講義なんかを聞いたり致しましたのですが、丁度その頃に道元ブームになるんです。諸君は若いから御存じないかもしねけど、和辻哲郎先生が「沙門道元」という論文を発表しましたですね。彦根の高商の教授秋山範二といいう人が『道元』という立派な本を出版しましたですね。それから、京都大学の田辻元教授が『正法眼蔵哲学私観』日本哲学の先駆という風な短い小さな本を出版されて、道元に対して非常に傾倒されてですね。日本にも道元禅師の様な深い思索をした人が居たのかと、日本人の思索力の力を評価されたりしました。私共そういう論文を読んで、道元の素晴しさというものに心酔したわけです。そして若い道元がですね、「五十四年一天を照らす」と言う様な非常に澄みきった様な境界を示されるものだから、道元禅師の宗教というものが、仏法の中で一番純粹なものだという風に私なんかも思つて、「発心、修行、菩提、涅槃、行持道環」と清浄の修という風な、そういう坐禅の仕方というものに大変な興味を持つて、まがりなりにも坐禅会に参加致しましてですね。「証上に万法をあらしめ、出路に一如を行ず」と言う風な言葉の中に、臨済とは違つた、非常な落ち着きを持つて端坐すると、そういう行き方の禅と言うものが私にとっては、非常にその当時

はそうしなくてはならないと思っておりましたですね。

ところが、京都大学に入りましたて、京都に参りますと、この臨済禅の方が京都は強くてですね。沢木さんは、兎に角、月に一遍位は田中の妙説庵と言う尼寺で摂心なんかをやつていましたけど、京都は何と言つても偉い臨済宗の人々が居りますもんですからして、そういう人々に接触しておりますと、従つて、今度は公案禪というものの深さと言いますか、面白さと言うものに目を開かれた様なことで、あちらこちらの禅堂の提唱を聞いたり致しましたですね。そして、皆様方は御存じでしょうけど、丁度私共入りました時に、鏡島さんとか酒井得元さんが留学して参りました時に、鏡島さんとかの哲学」と言う風なものが出版されたりして、西田先生の『懺悔道の哲学』と云う風なものが出版されたりして、西田先生は引退しておりましたけど、時々やっぱり散歩して来られ、月曜日講座というのが有りましたて、全学の学生に向つて、月曜日の晩に連続講義をなさつたり致しまして、京都大学は全盛時代でございましたですね。そういう雰囲気の中に、久松真一と言う先生がやつて参りましたて、この人も又西田幾多郎門下でしたけれども、素晴らしい人で、初めは良く分からなかつたんですけども、接すれば接する程、まあこんな人が居るのかと、いうことに驚いたんですね。洛西妙心寺山内の春光院と言うお寺の茶席に自身生活を守つていてるんですね。茶道三昧、御茶を点てて飲み、学生に向つても、実に懇切に、鋭どく批

判的精神を持つて指導される。私なんかも、もう、その先生にすっかり惚れ込んでしまつて、この先生は、臨済禪系統でございますからして、その教えにこう段々と近づいて傾いて参りましたですね。そうして、今日迄、何十年間先生の影響下に入つてしまつた訳ですけども、先生の書物は、『久松真一著作集』全八巻が出ております。それから、『禅と美術』とかですね。英訳されて出てまして、まだ続刊を出版予定でありますけどね。それから最近、先生の思い出みたいな、『真人久松真一』と言う、友人や門下生の80名位が、久松先生についての思い出を書いた書物が春秋社から出まして、これは私が編集致しました。名前だけですけども。まあそういうものを御覧になりますと、現代でもですね、仏法と言うものが、こういう人格を作るのかと思われる様な、素晴らしい久松真一と言う人を仏法が作ったわけですね。そして、恐らく仏教の歴史の中でも、この位はつきりと悟り、「証」の立場に立つて発表できた人は、私は居ないのではないかと思いませんですね。私は大した仏教学者じゃございませんけども、はつきりと、「証が、悟りと言うものが仏教の一番根本である。」とか、又、「釈尊以来悟りに入らない様な仏法は仏法で無い」と言うことを強く主張致しまして、事実証の立場に立つて仏教を講じ、発言し、発言しながらそれに生きた人だという風な点で、本当に素晴らしい人が居た訳ですね。

そして、その先生を中心として京都大学に学道道場と言うものを作り、後に、鈴木大拙先生の御招介で、ハーバード大学に先生が禅の講義に御出でになつて、私もお供して参りましたで、ヨーロッパ各国を回つて、更にエジプトやイスラエル、イラン、イラクを巡り、更にインドを経て色々な人に会つて帰つて参りました。そしてその学道道場がFAS協会と言ふものになりますけども、そういう学生が中心となり、京都大学を基盤として、学道道場からFAS協会に至つて世界的な関心を持たれているということは、久松真一先生の人格と、思索力、哲学と生き方によるのでありますけども、その門下或いは友人達がこれを高く評価して今日に至つている。そういう人を仏教が作り出した。又、仏教者と言うのは、そういう生き方をしなくちゃならないということを、身を持って教えられた様に私は思つております。それで、後繼者の一人に私も見られておる訳でござります。

今日は、そういう自分の主体的な関心が主になつてしまいますが、仏法に対しても、私自身は仏教学者と言われる程のことは無い。ただ自分の関心から、自分の興味あることだけを、見て参りましてですね。勝手な仏教学と言うものを持っているのでありますけども、そういう立場から、「禅と净土」と言うことのテーマに就いて少しだけお話ををして見たい

と思つて参りました。

それで、そういう学道道場を作りまして、それに至る迄の沢木さんの禅とか、それから、山崎弁榮上人の念佛とか言った体験と両方しまして、そして、京都大学に、参った訳ですけれども、結局お釈迦様の仏法と言うものは、坐禅をして、悟りを開いて、そして慈悲心を起こして80年生きた一人の修道者、ゴーダマ・シッダルダ、仏陀と言う人ですね。だから佛教と言うものは、結局坐禅をして智慧の眼を開き、慈悲の心を持つて生きて行くということが、だから佛教の根本精神は、智慧と慈悲と悲智円満と言われます様に、結局釈尊によつて人類に智慧と慈悲といふものを教えられた。その智慧を得る為にはやはり坐禅をしなくてはならない。坐禅と言うものは、基本的な行であるという風に考えざるを得ないのでですね。学道道場を開く時に、浄土真宗の者も居ましたし、キリスト教の人も居たし、マルキシストも居ましたんですね。私の様な者も居ました。何をそれじや実践するのかという時に議論が分かれましてですね。仲々共通した実践法が決まらないのです。結局最後は仏陀が坐禅をして悟りを得たんだから、坐禅というものが基本的な行だと、そういう意味では、やっぱり坐禅をやろうということに決まりまして、浄土真宗の人なんかも坐禅をしながら時々念佛が出るという様な、阿部正雄みたいな者も居りましてですね。「念佛をしては駄目だ」と言

われてまあ黙つてしまふのです。「駄目だと云われて黙るよくな念佛だと駄目だ」と私が言つて、又びつくりしてしまつて南無阿弥陀仏と言つておりましたけど、そういう修行の色々なケースが有りますけど、結局はやっぱり坐禅が基本的な行と決まりまして、今日迄F A S協会は坐禅をやって、久松先生は、曹洞宗風の只管打坐の人にはそれでいい、臨済宗風な人には公案を与えたりで、まあいわゆる基本的公案と言つるものを見出しして今日に至つておるわけですね。それで、やっぱり新しい公案でなくてはならないと言う風なことを主張されて今日に至つておるのです。『禅者久松真一』（京都、法藏館刊）と言う本を今書いておりますから、今年中には出るかと思いまますけども、これは印度仏教学会で一、三年前に連続的にF A S禅のことを書いて置きましたものをまとめたのですが、興味が有る方は御読み下さってみて下さい。曹洞禅の立場からは多少違いますけど、禅というものも、本当と言ひますか、在るべき姿と言うものの一面を、私はF A S禅というもの、やはり示しているという風に申し上げても良いと思います。それで、仏陀の立場はそういう具合にして、やはり坐禅と慈悲、坐禅によつて智慧の眼が開け、そして慈悲深く教えを説いて行つたという風なものが、まあ基本的な仏法でありますけども、そういう仏法がですね、アショカ王からカニシカ王が出来ますまでの間の数百年間といふものは、私の見た所では、イ

ンドは大変乱れてそんな仏法ではどうにもならなくなつてしまつた。一般に言えればですね。坐禅をして智慧を研いて自分を反省する戒律を持つて、という風な仏法ではですね、もうどうにもならない様な動乱の時代を経験致しますですね。そうすると、そういう戒律の仏法という風な単純なものではなしに、やつと仏陀が強調した、智慧と慈悲というのがですね。

当時のインド思想界、或いはインドの民衆を救う為には、もつと積極的な慈悲の面を強調する救済の仏というものが出来なくてはならなくなつて来たと言つても良いと思いますですね。

インド思想自体も発展致しました。インド思想自体にも慈悲の心なんか出てきますですね。そうすると、いわゆる大乗佛教時代に入りまして、釈迦一仏だけではなく、沢山の仏様が出て参ります。その中に、阿弥陀仏信仰というものが出来て参ります。今日の浄土經典と言うものは、大体二、三世紀に出来たものですからして、釈尊の知らない經典であることは申す迄もございませんですね。そういう經典が出来て、つまり淨土教というものがインドに広まつた。般若經なんかを基本として、その他の法華經とか華嚴經とか色んな一切經典なんか出来ますけど、そのものの一つに阿弥陀仏の本願という風なものを強調する浄土教と言うものがインドに広まり、龍樹が易行道を説いたりしている。無著、世親が淨土教に関心を持って、世親（ヴァスバンドウ）は『淨土論』と

いうものを書いたに違いないという学説が有りますけども、やっぱり書いたに違いない。そういうことを感じますと、淨土教というものの大乗經典の中に今三部經有つて、そして、それが理解の仕方をヴァスバンドウが『淨土論』に示したという風なことが言えますけども、つまり、そういう淨土教がですね、今日インドにその痕跡を残していないんですね。

去年の正月、40人許の人を連れて、久し振りにインドに仏跡巡拝に参りましたんです。皆様も御存じの様に、沢山の仏像が残っているんですけどね、阿弥陀仏と書いた仏像は殆ど無いですね。中村元先生が、始めてマトゥーラの博物館に一体だけ阿弥陀仏と書いた仏像が有ると報告されましたので、それだけは私も見落しておったものだから、今度は見てこうと思って参りました。キューーレーターに尋ねたら、「あの部屋に在る」と教えてくれましたので、行つて見ましたら、成程等身大の大きさと思われる様な仏像が有るんです。その台座にインド語でアミダ仏と書いてあるんですけども、もう足から上は姿が無いんですね。毀れてしまつて、両足だけ残っていますね。その台座に無量寿仏と書いてあるんで、阿弥陀仏に違いない。たつた一体だけしか阿弥陀仏と名前の付いた仏像が残っていない。インド全体にですね。まあそういうことを思いますが、一体阿弥陀仏信仰と言うものが本当に普及したかどうか、ということが疑わしくなつて来ますですね。

もう一つの証拠は、丁度親鸞上人と同じ時代ですね、12、3世紀に、チベットのダルマスワーミンというチベット僧がですね、インドの仏跡を巡拝致しました。その旅行記が、発見されまして、そして勿論チベット語で書いてあるものを英訳したものが出来ましたんですね。デーリッヒと言う人の翻訳で、それを私共は買い求めて、それを読んで見ますとですね。無量寿仏と言う名前の仏様が南インドに一つ有ったと言ふことが書いてありますけども、その痕跡はもう分かりません。そして、そのダルマスワーミンが、このナーランダですね、13世紀ですが、ナーランダで何年か勉強した。その当時は、もう13世紀に入っていますけども、まだ70名のお坊さん達が、ナーランダには居て勉強しておったと書いておりますですね。そして回教徒が出て来ると皆逃げてしまう。お寺をできるだけ埋めてですね、どつかに散らばってしまう。回教徒が居なくなると又た帰つて来て、70名のお坊さんが集つて、勉強していたと書いてありますですね。だからインドの佛教史で、もう10世紀頃で仏教は滅んでしまったと言うけれども、まだ、12、3世紀頃迄、ナーランダみたいな所には、70名のお坊さん達が勉強しておったという事実が分かりましたですね。そして、ブッダガヤの仏像を毀そとして、回教徒がひっくり返つて怪我をしたとか、成程書いてありますですね。そのダルマスワーミンがたまたまチベットに帰る時に

ですね、ナーランダの僧院長の所に挨拶に参りました。そしたら僧院長がですね、「今度は極楽浄土で会おう」と、そういう挨拶をしたと書いてありますですね。ということは、ダルマスワーミンも、チベットで阿弥陀仏信仰を持つており、ナーランダの僧院長も、死んだら極楽に生まれて、そこで会うんだという信仰を持つておったということを物語っていると、言つて良いと思いますですね。そういう証拠は、今日文献的に残つておりますけども、それ以外には阿弥陀仏の名の付いた仏像は、私も随分インドを見ましたけど、中村先生も随分見たんだけど、このマトウラの博物館に足だけ残った阿弥陀仏が、一体あるだけでございますね。

そういうことを思うと、インドに果して浄土教が存在したかどうかと。文献的には、浄土というものは、無著や世親によりますと、『撰大乘論』の中の十八円淨説と、それから世親の『浄土論』の説は殆ど同じだからして、浄土の観念においては殆ど同じなんですね。「世尊我一心、帰命尽十方、無礙光如來、願生安樂國」とヴァスバンドゥは『浄土論』の始めに書いておりますからして、私は阿弥陀仏の信仰を持つていると告白しておりますですね。だからそういう学者の間には『浄土論』を書いた様な世親はそういう信仰を持つておったと言えるんですけども、民衆の中にはですね、それ程普及していなかつたんじゃないかという風に思われるを得な

いですが、ふと考えましたらですね、そうじやないんだと。誰でも旅行しまして、インドの大地にこの夕日の沈む姿を見るとですね、真赤な太陽が西の空に沈むのを見ますというと、誠に西の彼方に西方極楽浄土が在るという信仰が出来た、ということは当然だという様な感じがする訳ですね。そういう実感を持ちます。私もそういう実感を持ち、皆もそう申しましたですね。そうするとインド人はですね、阿弥陀仏という仏様は、やっぱり西方極楽にいる仏様であって、インドには居ないんだと、日本でこそ阿弥陀仏と言うのが日本の各寺、浄土宗系統のお寺には皆な阿弥陀仏が有りますけども、インドの人達は、インドにはお釈迦様が居て、阿弥陀仏なんてものは、西方の浄土に実在するのだから、インドには阿弥陀さんは居る筈が無いという風に、考えたんじゃないかという風に、まあ思つたり致しましたですね。それが妥当な解釈かどうか分かりませんけど、兎に角、阿弥陀仏の名前の付いた仏像、石像は、カニシカ王の首の取れた石像が有りますマトウーラの博物館に、胴体の無くなった台座だけ残っている阿弥陀仏像が一体有るだけでございますですね。

だからつまり、浄土というものは、一種の方便説に違います。大乗仏教としては、淨土思想として淨土の信仰が伝えられています。又、或いは華嚴經や法華經なんかにも淨土教思想が含まれています。淨土という考えは、ヴァスバンドゥなんかが、この十八円淨という学説によつて、極楽淨土というものは、こういう世界であるという風に、一応大乗佛教の概論であります『攝大乘論』の中では唱えておりまして、一般に理解されていたように思います。又カルカッタのジャイナ教の寺院なんかに参りますと、あのきらびやかな装飾がしてあって、八功德水の満ちてる池が有つたりしまして、丁度極楽世界を、そこに現出した様な寺院が今日迄残つておりますですね。

だからつまり、浄土というものは、一種の方便説に違います。大乗仏教としては、淨土思想として淨土の信仰が伝えられています。又、或いは華嚴經や法華經なんかにも淨土教思想が含まれています。淨土という考えは、ヴァスバンドゥなんかが、この十八円淨という学説によつて、極楽淨土とい

土論』によつて、その極楽世界というものが、結局「入一法句」三種二十九句莊嚴と言ひますが、極楽淨土には阿弥陀仏、觀音勢至菩薩、それから人間が居ると。三種二十九句によつて、極楽世界は莊嚴されている。その具体的な莊嚴といふものは入一法句するんだと、世親は言つてます。一つの言葉の中に入つてしまふと、パダ（一句）の中に入つてしまふ訳です。入一法句と言うのは何かと言つたら清淨句。清淨という句。清淨句とは真実智慧、無為法身なりと、こういう風に世親は言つてる訳ですね。無為法身、法身だといつてますね。だから、極楽世界は宮殿樓閣によつて莊嚴されるけども、それは結局一つの言葉の中に入つてしまふと。一つの言葉とは何かと言つたら、清淨な言葉である清淨句、つまり清淨句とは眞実の智慧であると。無為法身であるという風に世親は理解してゐるんですね。だからして、世親は極楽淨土と言うものが無為法身に過ぎないのだと、無為法身が色々な形を持つて表現されている。これは妙有の世界であると。妙有だと。真空妙有ということが『般若經』なんかで言われますですね。真空妙有だと、『般若經』の論理から言ひうと、妙有の世界として淨土を認めてるわけですね。そういう風に理解すれば、何も極楽淨土というのが一つの方便として、そういう一つの西方淨土が実在するということですね。だから法然等も結局このヴァスバンドウの『淨土論』というものを淨土三

部經の他に、一つの論書としてこれを基本として、淨土教を立ててゐるという風に学者は言つております。私なんかも、そういう点から教えられて、結局淨土というものが、世親の理解した様な、こういう風な淨土として、理解すれば納得いく訳ですね。そういう論文を、卒業論文として書いて、一応納得したつもりでおりましたですね。それがインドの、つまり淨土教と禪の問題でございますけども、その発端の態で一応問題が解決してゐるわけです。

それで、中国に参りますとですね。尚すれ違つてゐる所の問題が出て参りまして、中国の淨土教となるというところの一番始めは、廬山の慧遠みたいなですね、この『般舟三昧經』ですね。『般舟三昧經』と言う浸透した淨土教学が、盛んになりますですね。廬山の慧遠の淨土教というのは、仏立三昧と言う、仏が目の前にたたれるという観想的な三昧を中心とした淨土教でござりますですね。それはそれとして、今日迄、『般舟三昧經』系統の淨土教が、まだ廬山の慧遠を中心として、ずっとこう継がつて、そしてこの禪淨双修みたいなですね、廬山寺系統の淨土教として中国に、それが淨土教の主流になつて残つております。それから、隱元なんかによつて日本に伝えられて、念佛禅みたいな形で、今日に至つてゐる訳ですね。では、それに対して、つまり法然なんかが得た、善導の『觀無量壽經』中心のですね、或いは『無量壽經』を中心と

した様な、或いは『阿弥陀経』を中心とした、いわゆる純粹淨土教と言われておる様な、そういう淨土教が法然、親鸞等によつて日本に伝えられる訳ですね。『般舟三昧経』とはちよつとそういう点で、違つておりますですね。前者は禅淨双修みたいな形で發展して参ります。ところが、善導はですね、まあいわゆる凡夫性なんてことを強調した、人間の凡夫性を強調致しまして、こういう観想的なことは言つていなことは無いんですけども、やっぱり善導も坐禪もしておりますし、摂心常 在禪と、「心を摂して常に禪に在れ」という様な言葉もちゃんと自分で、自分に言い聞かしておるんですところが、日本の善導流の淨土教では、こういうことはまた、禪宗臭いものだから、オミットしてしまって、称名念佛だけをする様な、純粹淨土教という風なものになつてしまつておりますですね。それ故に禪と対立したりしますけれども、私なんかが見ますと、必ずしも善導はですね、そういう対立はしない、摂心、心を摂めて常に禪にあれという言葉をちゃんと使つておりますからして、禅淨双修しているんですね。

法然なんかでもかつては禪淨双修しておりましたが、後には專修念佛と言つておりますけれども、その著作を良く見ますとですね。そうじやないですね。特に私が、現代淨土教の在り方として、強調しなくてはならない法然の言葉の中に、法然はやっぱり、滅多に悟りなんか開けないと言つた癖に

「念佛にいさみある人は、無遍の悟りを開くべき人なり」と、こういう風にはつきりとこういつておるんですね。禪勝房に対して、念佛を喜びいさんで申せば無限の悟りが開けるんだということを答えていいるんですね。法然の『四十八巻伝』の中にも、この法語はあるんですけど、これを言うと禅宗と殆んど同じことになつてしまふんですね。坐禪をしても悟りが開けるし、又念佛すれば立派に悟りが開けると法然は言つてるから、禪宗と殆ど同じじやないかということになりますね。それ故、淨土教は念佛しても、そうたやすく悟りが開けないからこそ死んでから後に、悟りを開くのであるという教えが説かれたのです。念佛してたやすくこの世でお悟りが開けるのなら、淨土教は必要でなかつたと解釈し、この法語は淨土宗で余り重要視しておらなかつたのです。それが長い間の淨土宗の伝統でございまして、この法語は今日の淨土宗からオミットされておりまして、長い間ですね、昭和の時代にやつと発見されたということでござりますね。

だから、日本の淨土教というものは、お互に日本の仏教の宗派仏教になつて、対立に会つてですね、お互に批判しあつて、道元さんでも、念佛しているのは田んぼの中でガヤガヤ言つている蛙みたいなものだと言う様なことをおつしゃつてますけども、道元様がもう50年、50年でなく、法然さんと同じ年齢になると…、後30年も生きておられたたらですね、ど

う変わられたかってことを、私はまあ卒直に思うんですね。

あの秀才で、あの純粹な道元さんが80迄生きたらですね、もつところ脱落して変わられたんじやないかってことを、まあ勝手に思つたりする訳ですね。曹洞宗なんてものも、或いは変わったんじやないかってことを、まあ思つたりします。

54年で天才的な生涯を送られたんでございます。致し方ございませんけど、それは、それなりに立派なんですけども：

それで、淨土と禅ということから少しずれますけども、一つ私にとって最近問題になつておりますのはですね、何故、曹洞宗からは、禪芸術みたいなものが生まれて来ないのかつてことですね。臨濟禪は、禪芸術を沢山産み出しているけれども、曹洞禪はどうもそういう点で、まあ乏しい訳ですね。

それは色々な議論が有ると思いますけど、こないだ、柳田聖山さんの話を聞きましたが、道元さんはあの『十牛図』なんでものを見ただろうかということですね。曹洞禪では『十牛図』なんでものを殆ど問題にしないけれども、柳田さんは、道元さんは見たに違ひないけれども、何かそれに就いて余り申していらっしゃらない。『十牛図』というものが、やっぱり禪芸術の生まれて来る根拠みたいに、柳田さんは言う訳ですね。それはあの廓庵の『十牛図』、時代的には、道元さんは、13世紀の方ですからして、中国に行つた時はですね、普明禪師、廓庵禪師の『十牛図』は既に、有つたと思える。普

明が11世紀、廓庵だって12世紀頃の人だと言われておりますからして、道元さんは13世紀の人だから、行けばですね、見たんじやないかと思われる。その寂号を付ける様な人達がいた時代ですから、見たに違ひないってことも言えるけれども、まあ道元さんはああいうタイプの人ですからして、そういうものには余り関心は示さなかつたかもしません。まあ皆さん方専門ですから『正法眼藏』の中に、そういうことが有るかどうかですね。つまり、悟りの色々な段階を示す様な『十牛団』というものは、道元さんの修証一等の禪といふものに対しても、ちょっと受け入れは違うからして、道元さんは無視したと言つても良いと思いますですね。私は素人だから良く分かりませんけど。

それにもしても柳田さんは、そう言つていましたけれども、川端康成さんが『美しい日本の私』で、道元さんの本来の面目という題で、「春は花、夏ほどとぎす、秋は月、冬雪さえで冷しかりけり」という歌を良く色紙に書くんだと言つています、又良寛さんの「かたみとて何か残さん春は花山ほどとぎす秋はもみぢば」というように、曹洞系の二人の禪者の歌をですね、川端さんが『美しい日本の私』という本の中であの二つの歌を引いて、それから明恵の「あかあかや、あかあかあかや、あかあかや、あかあかあかや、あかあかの月」といった明恵の境界という風なものの中にある日本人の、或い

はヒューマニスティックな美しさというものを、日本の美と理解してしまっている。本来はそうじやない、本来の面目でなくちゃならないという風に、柳田さんは言う訳ですね。

柳田さん風に禅を解釈すると、廓庵の『十牛図』だと第八の無相の自己から第九では、今度は返本還源で、桃の花が咲くんですね。そして、第十図が今度は入廓垂手になって来るですからして、この臨濟禪風に言えば、本来の面目というものは、つまり廓庵の八、九、十という風な形でしか妙有の世界が出て来ないと解釈されます。だから禅芸術というものが、そういう無相の自己、或いはこの真空に立った上での妙有として禅芸術が生まれて来たんです。だから、夢窓疎石なんかがですね、苔寺を作ったと言うのは、つまり、苔寺っていうものは、そういう、無相の自己を体得した疎石がですね、夢窓国師が自分の墓だと言つてますね。禅芸術というものは、皆そういう妙有の世界、還相的なものだと。久松先生もそういう解釈ですね。禅芸術とは、つまり還相的な芸術であると。寿像という言葉もあるそうですね。それから寿塔、寿蔵。寿塔これは、苔寺の美しさというものは夢窓疎石が自分の墓場を作つた。そして禅の境界というものを、ああいう苔寺という坐禅石を置いたり、ああいう理想的な禅の庭園を作つて、ああいった寿塔といいますけれども、それはお墓、墓場なんですが、墓場を只だ墓にしないで、ああいう庭園にし

たと。だからあの龍安寺の石庭に致しましてもですね、これはやっぱりあの空間の中にある石の配置を十五、六個の石を配置することによって、つまり、そこに禅芸術を生み出した。それを見る人が禅の世界にこう導びかれて行く。そこに禅芸術の持つてゐる意味がある。下手な枯山水では駄目ですけれども、そういう空間にですね、ああいう石を配置したという風に、つまり、臨濟禪風の禅芸術というものは、『十牛図』の八から九、十という還相面において、この理解されなくてはならないと言う風に私は、久松先生なんかに接して教えられてきました。柳田先生も久松先生門下でありますから、そのような見解を示されたものと解釈致します。

良寛に「かたみとて云々」といった歌がある。この歌は一体どういう意味なのか。あるいは、道元さんの本来の面目と言つて、「春は花、夏はととぎす、秋は月、冬雪^{すずめ}さえて冷かりけり」といった歌がある。これを川端さんは、只だそれを美しい日本の自然だという風に見てしまつて、間違つているんだ、という解釈を柳田さんはしておりますけど、これは非常に大きな問題としてですね。禅というものがそういうあたりのままの自然、我々の見聞覚知というものを否定しないで、そのまま認める場合が有る訳ですね。付かず離れず、見聞覚知に即して妙有の世界を見ると言うことが臨濟禪でもいわれますから、道元さんが本来の面目として、「春は花、夏

ほととぎす、秋は月、冬雪さえて冷しかりけり」という風におつしやつたあの歌つていうものは、本来の面目であるとして道元様がおつしやつた。それを川端さんは、只だ自然そのものの美しさ、こうして見れば成程、そこに美しさがある。そこに日本の美があるんだと。明恵が月を見て、月の下で坐禅をしたと、良寛はかたみとして、それを自然のありのままをかたみとして残したんだという風にしか理解しておられなけれど、それは本当の禅の理解じやないという風な、まあ口調のお話の様でございますね。その後二人で論究してはおりませんけど、講演の録音した声を聞くとそういう風な考え方だと思えます。

だから、道元さんには『十牛図』みたいなああいう妙有の世界、八図から九、十と出て来る様な還相的な禅芸術という様なものは生まれて来ないんじやないかと思えるのです。本証妙修でありますからして、そういうこの悟りの段階をああいう風に現わす、という様なことは嫌われたんじやないかといふ風に私なんかは思つたりする訳ですね。だから、禅芸術の庭園とか、絵画とか、彫刻とか色々こう有りますけど、それは臨済禅の本質にかえつて、それはやっぱり妙有的なそれを通して言わば禅の世界への導きの方便として禅芸術が存在している。それによつて人々を禅の世界へ導いて行くんだと。言わば還相的な『十牛図』で言えば、八、九、十という

ような形でああいう芸術が、生まれて來てるんだという風に解釈することは、間違いではないと思えますんですね。それに対して本証妙修、只管打坐ということを本覚法門的に主張する曹洞禅ではですね、禅芸術というものが生まれにくかったわけですね。禅芸術の理解ということをまあ久松さんなんか非常に優れた学説をお持ちになつておりますので、私なんかもそれを見て興味を持ちまして、理解を深めたわけです。淨土といえども、それは方便でありますからしてですね。人々をそういう世界に導びいて行く為の、有相の莊嚴の姿である。人々はそれに応じてそういう極楽に生まれたいと思う。言つてみれば、そんな物何も無い訳ですね。阿弥陀仏は色も形もましまさないのが本当の阿弥陀様であると親鸞聖人は申しております。有相の淨土というものはやはり方便であつて、無相なるものが相をとつて形を表わすのです。また、淨土は西方の淨土という形を持つて死後の世界として申しますけど、天台とか禪とかつてものはですね、天台に實相院とか、三千院とか、寂光院とか、そのお寺が現に在りましてですね。ここは常寂光土であると、本当の淨土ってのはここにこうして寂光院の中に有るんだと、實相院は、この實相院の中に入つてみようと、三千院はそこに入つてみれば天台の諸法實相が分かるんだという気持ちでそういうお寺が出来てる訳ですね。それに対して禅は、五山文学なんかもそうでありますけども、

五山の庭園を作ったり絵画を残したり、石庭を作ったりしてることは、それを見ることによつて人々を禅の世界に導く一つの方便であるといつても差し支え無い訳ですね。

そういうものの一切を道元さんは否定したんじゃないかと、しかし否定しながら自分は歌を作つたりしてですね、歌を残していらっしゃる。そういう所に道元さんの純粹さというものがあります。しかし曹洞宗全体はある意味では泥臭いですね。曹洞土民と言われます様に、綿密な修行はしますけれど、そういう芸術作品というような物は残していない。そこに色々な禅風の違いがあつた。やっぱりある様に私なんかに思えますね。

そういう臨濟と曹洞という二つの禅が日本にあって、徳川初期に鈴木正三という人が現されましたですね。この人は曹洞系列の人でありますけども、道元をも批判していて、そして、もっと庶民の、或いは武士から、士農工商全ての日常生活の在り方を修行の方法としてやれど、念佛の良い人は念佛をしろと、ひと鍬、ひと鍬力強く鍬を振いながら、南無阿弥陀仏と唱えて自分の煩惱を断ち切れと、そして清淨な田畠から出来たお米や野菜を食べた者が成仏できるようにと、そういう願心を持って田畠を耕すんだということを教えた武士出身の念佛者がいた。これは又臨済もやれば、曹洞もやられたのですね、『驢鞍橋』の中巻なんものは、公案をちゃんと処理

していますけれども、大変高い見識を示しておりますですね。そういう武士出身の禅者が現われて、同時に念佛者でもありましたけども、日本佛教の改革をしたということに私なんかも非常に共鳴を感じますが、この人は余り芸術のこととは言わないけども、道元さんに対する尊敬もしておりますけども、又一方では、批判したりしておりますですね。だから、禅淨双修ってこともそこから現われて来ましたですね。

日本の佛教は宗派佛教であつて、禅の特色を禅宗は現わしている。淨土宗も淨土教の特色を現わしている。これはこれで結構ですけども、お互いの良さ、欠点を知らないですね。独りよがりになつてしまつているのは駄目だということを、田辺元先生に教えられてですね。田辺元先生という人が、どこでどう聞いたのかですね。『キリスト教の弁証』と言う本を貰つたら、その中に日本の佛教というものは、新しい念佛禅が起つて来なければ駄目だと、宗派に分かれてしまつてお互い孤立している様では日本佛教を起死回生することができないと。まあ絶対弁証法みたいな論理からだけではございませんですね。実際それを見てそういう予言をしていらっしゃる人ですね。そういう所に田辺元という哲学者の非常に求道的な哲学者の持つていた炯眼にも恐れ入る訳ですけども、私なんかはそういう所にも興味を感じまして、禅も淨土も創立当時の人々は、お互に批判し合つてゐるけども、現代では、お互い

良さを理解し合わなくてはならない、又同時に欠点もお互い批判し合つて、新しい仏教の在り方つてものに到達しなければならないってなことをですね、偉そうに言つたりして来たんですけども、これは大変お叱りを受けるんでしようけども。沢木さんなんかは、曹洞宗風の禅者でしたけど、私が接しておりました頃の沢木さんはですね、もう字は下手糞で、黒板の上でもとんでもない様な字を書いておりましたけど、去年偶然その御弟子さんから沢木さんの書だというものを見せて貰つたらですね、仲々上手な字を書いていらっしゃるですね。何時の間に稽古したんだろうと思つたんですけども、よくよく稽古したらしく、見られる様な書を書く様になつてあるんですね。まあこれは沢木さんの偉さかもしませんけども、あの脱落した人がですね、曹洞宗の人にしては珍らしいといふ訳ではありませんけど、立派な書を書いてらっしゃる。大人しい書でありますけど、素直な書を書いていらっしゃる。臨済系の人は、もう跳ねる様な、下手糞な字を書きますけど、それでやっぱり一つの禅風を現わしている様ですが、曹洞系の人は皆な奇麗な字を書いているんですね。何か禅らしくない、浄土教の人の様な書を書いたりしておりますが、何故そななるのか。行儀綿密という所が書にも現わされてくるのかと思えます。ところが問題があります。本当の禅の境界が書に現われて来るかどうか。その曹洞禅というものが、創

造、そういうこの創造意欲を駆り立てる様な禅風はないんじやないかと、そういう表現愛というものが無くてですね、そういう風な物を生み出さない綿密な修行だけに終る様な禅風ではないかということを思つたりする訳です。これは非常に卒直な素人の外から見ている禅、臨済禅、曹洞禅に対する私の感想であつてですね、永平寺のお坊さん達に接してみて、私の範囲内に接する禅僧とやっぱり違うんですね。どうも違うんですね。どこが違うかって言うと、やっぱり言いにくいくらいですね。ですが違うかって言うと、やっぱり違います。言葉にならないんですけども、やっぱり違うんですね。言葉にならないんですけども、どつかやつぱり違つてますんですね。それは一体何かと、何がそうさせているのか。道元さんは少し違うんじゃないかという気がするんですけども、今日の曹洞禅の人達は、何かやつぱり臨済禅の人達とは違つておることを私にはまあ直感されますですね。それはやっぱり禅風の違いでもあるという風なことを感じてている様なことですが。

「禅と淨土」という御話にはならなかつた。色んな感想を只だ単にぶちまけて、御叱りを受けるかもしれませんけども、そう言つても良いだらうと思って、御話したことで、色々と又た御話頂ければ、大変有り難いと思ひます。今日はこの位の雑談で、ちょっと疲れましたので、御諒承願いたいと思います。御清聴有り難うございました。